百人一首にある歌人名

NO.	歌人名		人物について	訳	性別	5歌仙	36歌仙	開期 FROM	開期 TO	生存期間	題性和歌数			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
											和歌集名	何番目の和歌	収録歌	古今和歌集	後撰和歌集	拾遺和歌集	後拾遺和歌集	金葉和歌集	詞花和歌集	千載和歌集	新古今和歌集	新勅撰和歌集	続後撰和歌集	新古今和歌集	続古今和歌集	新続古今和歌集	玉葉和歌集	続千載和歌集	続後拾遺和歌集	風雅和歌集	新千載和歌集	新後拾遺和歌集	新後撰和歌集	新続古今和歌集
1	天智天皇	中大兄皇子	中臣鎌足と手を組んで蘇我氏親子をほろぼし大化の改新を行った。中臣鎌足を藤原鎌足という名前にした。	実りの秋の取り入れにあって、田の近くの仮小屋で屋の番をしている。屋根をふいてある苫の目があらいので、すき間からも洩れる夜露に、わたしの袖はしきりにぬれていますよ。	M			626	671	45	2	後撰集	302	4		1							1					1				1			
2	持統天皇		天智天皇の皇女。天武天皇の妻。政治好きだった。	春は過ぎlargeて、夏が来たようですね。夏真白には、あのように白たくさんなような衣干されているのですよね。	F			645	702	57	3	新古今集	175	2									1	1											
3	柿本人麻呂		山部赤人と並ぶ歌人。天武天皇と持統天皇に仕えた。「万葉集」には誰よりも多く載っている。	山鳥の尾のように、長い長い秋の夜を、わたしは、恋しい人の訪れもなくて、ただ一人、さみしく寝ないればならないのだろうか。今ごろどうしているのかな。	M		○	不明	不明		3	後撰集	778	248			105					22	6	11	25			25	3	11	9	10	15	3	3
4	山部赤人		三十六歌仙の一人。聖武天皇に仕えた身分の低い役人だったが、優れた宮廷の歌人であった。柿本人麻呂を尊敬し、二人は大伴家持から大変尊敬されていた。	田子の浦の海岸にでてみると、富士がこれまでとっても立派なのが見事に見えるのよ!真白で、その高い峰には、今もしきりに雪がふり続けっていては知らない。	M		○	不明	不明		4	新古今集	875	46			3					7	2	4	9			7	2	2		3	4	2	1
5	猿丸大夫		百人一首の歌が誰されたのは古部記和に歌者天皇の妻子が聞いた歌全中のことさに歌された。大伴黒王の歌は猿丸太夫天の系統である。三十六歌仙の一人だが詳しいことは何もわからず、単なるたかどうかも未だ疑問が残る人物である。	奥深い山のその下敷き様にもしたもんを踏み分けながら、妻をもとって暮らしている悲の声を聞くと、秋は、ひとしお悲しい思いがすることだ。	M		○	不明	不明		1	古今集	215	7	①																				
6	中納言家持		名門・大伴氏の子孫。一生の大半を地方官人として過ごしたが、万葉集には家持の歌が一番多く載っている。	七夕の夜、天の川にかけたという、あの伝説の橋を思わせるような、この宮中の階段。この階段に、真っ白な霜がうりて、その霜の白さを見ると、思ちなさいよりはるよりだなあ。	M		○	718	785	67	8	新古今集	620	62			3					11	4	3	8			6	3	4	5	3	7	1	4
7	阿部仲麻呂		若くして留学生として唐へ渡り、大学で学問を修めた。遣唐大使として唐に渡った藤原清河とともに宋国皇帝に仕えた。そして、役人として重用された。李白や王維などの有名な詩人とも交流があった。	大空をはるかにみわたすと、月が美しくのぼっている。ああ、この月はふるさとの春にある、三笠の山にのぼった、あの月つかしい月なのだ。	M			698	770	73	1	古今集	406	2	1								1												
8	喜撰法師		六歌仙の一人。謎の多い歌人。	私の草庵は都の東南にあって、そこで静かにくらしている。しかし世間は私が世の中から隠れてこの学問の心に住んでいるのだと世ってしまうよ。	M	○		不明	不明		1	古今集	983	2	1											1									
9	小野小町	在子	六歌仙唯一の女流歌人。小野良実の子。小野比右子の孫。惟正義母と比は伝える。在原業平と文屋康秀と比は友達。文屋康秀と文を送りあっていた。「薬師寺恵の花瓶遺し」の伝説がある。	桜の花の色がすっから色あせてしまったように、私の容姿もすっか変えてしまった。春の長雨が降り続き、私が人の恋にふけっている間に。	F	○	○	不明	不明		1	古今集	113	64	17	8					5	6	4	6			5	1	2	2	4	3	2	1
10	蟬丸		六歌仙時代の人。詳しく知られていない。琵琶の名人。逢坂の関のあたりに住んで歌人を世った神社がある。	これがあの有かな出て行くも帰るも人。知り合いも知らない他人も。皆ここで別れ。そしてここで出会うと言う言葉を逢坂の関とかたるな。	M			不明	不明		2	後撰集	1089	4		1							2												
11	小野篁	参議篁	小野比左子の異母兄で嵯峨、小野比左子との恋を扱った「篁物語」が有名。嵯峨天皇が怒ったのではないかと言われるほど、少年時代から優秀だった。遣唐副使として唐へ渡ろうとした際、藤原常嗣に船を強奪され、帰不日のあまりに遣唐使を降りと結果隠岐の島へ流される。2年後に都へ戻り、のちに宰相となった。	大海原に漕ぎ出でぬと人は言ふなれど、海人の釣り舟にはのぼるとぞ言ふなる。	M			802	852	50	1	古今集	407	12	6							2			1			2				2				
12	僧正遍昭	良年宗貞	六歌仙の一人。素性法師の父。桓武天皇の孫。仁明天皇に仕えていた。小野小町とは仲なしなかったが、小野小町に恋心を抱いていて深日語うことができたら結婚を考えると言ったのでがっかりしてしまった。その後35歳で出家した。	吹きから風よ、雲の中の道り道を、どうかふき閉ざしてくれ。舞い戻わって天に帰って行く天女たちの姿を、せめてもうしばらく、ここにとどめておきたいのだ。	M	○	○	816	890	74	1	古今集	872	35	16	5	5				2			2			1		2		2				
13	陽成院		第57代天皇。藤原高子の子。名は貞明。9歳で即位したが、実権を握った伊勢が実は「つとして17歳で退位させられた。藤原基経の計略で退位は させられたといわれている。その後親子内親王が天皇となった。親子内親王と結婚した。陽成院となったのは上皇になった後。	筑波のいたさきから流れ落ちてくる男女川（みなのがわ）が、最初は細々とした流れから次第にかさが多増して深い淵となるように、恋心も次第につのってやまず は思のように深くなっている。	M			868	949	81	2	後撰集	776	1		1																			
14	源融	河原左大臣	嵯峨天皇の皇子だったが臣下に下って、源の姓を名乗るようになった。宮廷法師の祖父。「源氏物語」の舞台となった河原院という大きな邸宅に住んでいた。宮廷法師の代表で河原院は使われていた。1０２年後に花山天皇と河原院を恋愛法師が源に譲んだ。	奥州のしのぶもじずりの乱れ模様のように、私のふも恋のために乱れていますが、いったい誰のためにこのように思い乱れているのだろう。	M			822	895	73	1	古今集	724	4	2	2																			
15	光孝天皇		天皇の身分でありながら、賢沢はまず自炊を行っていた。「源氏物語」の主人公「光源氏」のモデルとされる。	あなたに君はよりよりとまって、君君を摘んでいる私の袖に、雪のあれ降が、しきりに降りかかります。こうして摘んだ君君です、召しよがってくだされば うれしいんですが。	M			830	887	57	1	古今集	21	14	2						3	3	3	1			1		1	1					
16	在原行平	中納言行平	平城天皇の子孫のエリート貴族だった。在原業平の異母兄。平城天皇の皇子、阿保親王の子。弘子の妻。25歳のときに父の阿保親王がこくなった。	あなたと別れて因幡の国へ行きますが、稲葉の山の峰に生えている松のように、あなたが待っていると聞いたらな、すぐにも帰に帰ってあいますよしょう。	M			818	893	75	1	古今集	365	10	4	3					2						1								
17	在原業平	在原業平朝臣	六歌仙の一人。在原行平の異母弟。母は、桓武天皇の皇女。平城天皇の孫。「伊勢物語」の主人公「昔男」の主人公のモデルとされている。藤成院の母である藤原高子とは仲がよった。しかし、恋は叶わず恋病が原因で出家した。藤原高子を見ちった。兄の行平とともに歌作りの名手でもあった。	○	M	○	○	825	880	55	1	古今集	294	88	31	10	3				12	7	7	5			3	3	2		2	1	1	1
18	藤原敏行	藤原敏行朝臣	三十六歌仙の一人。平多天皇に大変可愛がられ、若くして兵衛督（宮廷を守る軍隊の長官）になったエリート。書道の達人でもあった。２７歳でくなったが、生き返ったりした。	住の江の岸に打ち寄せる波のように、どうして夜の夢の中でさえ、あなたは人目をはばかって遠くなれないのだろう。	M		○	不明	901？		1	古今集	559	27	17	4							1			2	1			1		1		
19	伊勢		平多天皇の妃・基子に仕える美しい女官だったと言われる。妃の兄弟・藤原仲平、仲平の兄の人、平多天皇の皇子まで生んだとされる。	難波潟のスリコに洗っている海の藻に、平安のあれ型が、しきりに降りかかります。こうして海に恋慕にて、召しよがってくだされば うれしいんですが。	F		○	877	939	62	8	新古今集	1049	130	20	76	25				15	7	5	8			10	3	1	2	5	3	2	1
20	元良親王		平安時代一番のプレイボーイと言われ、男ハに恋がない性格だったことから思わず平多上皇の怒を買国を、当然恋浮が広がり離れ離れになってしまった時に この歌を詠んだ。時に恋名物語に物われている。	恋慕の人を、あなたのことを思いており、今となっては広くなったの恋にです。それならいっそ明日	M			890	943	53	3	後撰集	960	19		6	2				1		1				1	2	2		2	1	1	
21	素性法師	良年玄利	僧正遍昭の子。親子そろって優秀となり、由良つ三十六歌仙に選ばれる。百人一首に記載されている歌は「何天皇法師の酔書合わせの際に 詠まれた。その西鉢は紀伊が２０代の時に書く美しい女性になったらと思わず平多上皇の怒を買国を、当然恋浮が広がり離れ離れになってしまった時 に この歌を詠んだ。時に恋名物語に物われている。	「恋慕人が」今すぐ行くと言ったので、待ち続けていたら、九月の有明の月が出てしまった	M		○	不明	不明		1	古今集	691	62	36	7	2				2			2			2	1	1		1	2	3	1
22	文屋康秀		六歌仙の一人。文屋朝康の父。小野小町と文を送りあっていた。	山風が吹きおろしてくると、たちまち秋の草や木が萎れてしまうのです。きっと山風のことを「嵐(荒らし)」いうのだろう。	M	○		不明	不明		1	古今集	249	6	5	1																		
23	大江千里		大江音人の子。学者の家系で生まれた。百人一首の和歌は家恋歌を詠にて上手とった歌人を思って詠んだ。	秋の月を眺めていると、離れと思い起こされるのの恋しいことです。例はわたしひとりだけにやって来たのではないのですが…。	M			不明	不明		1	古今集	193	24	9	2					3	1		1			1	1	1	2	1	1		1
24	菅原道真	菅家	優れた学者で、平多天皇と醍醐天皇に重用された。右大臣まで上った。紀貫之の恩ていた大学の講師。藤原時平が天皇に進言の罪詳を吹き込んだのが原因で太宰府への島流まされ、本工で一生を終えた。学問の神様として信仰を集められている。	この度の旅は忙くて慌ただしくて、道と名わかりの山を通ったのかどうかもよく覚えていたでしょうか。	M			845	903	58	1	古今集	420	37	2	3	6				16		3	3				1				1		1
25	藤原定方	三条右大臣	藤原基恒の父。和歌や音楽に優れた上流貴族だった。	遥うというものの遥は、お隠れいうものはかがずが、そのあに遠ものであれば、遥遥山のおかげでも手繰り寄せるように、人に知られず、あなたのもとにいく方法を知りたいものです。	M			873	932	59	2	後撰集	700	16	1	9						1	1	1				1				1		1
26	藤原忠平	貞信公	藤原実方の曾祖父。藤原時平の弟。摂政の藤原時平が病死した後、藤原忠平が右大臣となり醍醐天皇に仕えた。醍醐天皇の父の宇多法皇の お供で小倉山の紅葉にでかけたときに宇多法皇が醍醐天皇にこの歌を見せたいというので百人一首の歌を詠んだ。貞信公は同僚につけられた名前。	小倉山の峰にもんに遥よ、もしおまえに、物のわかるものあるなら、今度ここへ、天皇がいらっしゃるまで、どうか散らないで待っていておくれ。	M			880	949	69	3	後撰集	1129	10							1	4		1				1	2						1
27	藤原敏樹	中納言敏樹	三十六歌仙の一人。紀貫之や凡河内躬恒など、古今集時代の有名な歌人たちと親交があった。歌人たちのスポンサーような役目をしていた。	みかの原を湧き出て流れる泉川は、その人をいつ見たといっては、恋しく思ってします。本当は一度たりとも見たことをないのに。	M		○	877	933	56	8	新古今集	996	55	3	23					7	4	4	1	1		3	1	3	1	2		1	1
28	源宗于	源宗于朝臣	三十六歌仙の一人。光孝天皇の孫。最下位で下級の役を転々とさりになった。	山里はいつの季節でも寂しいが、冬はとりわけ寂しく感じられる。春なってくれる人も絶無と、思ふの思も枯れてしまうのだと思うと。	M		○	不明	939		1	古今集	315	15	5	4					2						2	2		1				
29	凡河内躬恒				M		○	不明	不明		1	古今集	277	169	56	23	34				10	6	7	11			19	6	5	1	6	5	3	2
30	壬生忠岑		三十六歌仙の一人。壬生忠見の父。「古今和歌集」の選者。官位は低かったが歌人として名高く、藤原定家、藤原家隆、藤原公任などに敬意されている。藤原道子と一夜限りの恋仲だった。	あのときからかたたは、夜明けの来るのがつらい、夜明けが来るただに、あのときの、あなたを思い出してしまうから。	M		○	不明	不明		1	古今集	625	80	35	10	12				3	1	3	3			7	1	2		2	1	2	
31	坂上是則		坂上望城の父。	はのぼの と明け明けていくころ、月を見ると有明の月がさしているのかと思う頃どに、吉野の里一面に まっしいばかりの、白雪が降り積もっていたよ。	M		○	不明	不明		1	古今集	332	41	8	6	3				7	1	1	5				2	2		2	2	1	1
32	春道列樹		百人一首の和歌が詠まれたことで有名になった。	山あいの谷川に、風が吹け渡したなんとも美しい眺めあったのだが、それは流れ れずにいる紅葉であったなんなのか。	M			不明	920		1	古今集	303	5	3	2																		
33	紀友則		紀貫之の従兄弟。「古今和歌集」の選者。	こんなにも日の光が降りそそいでいるのどかな春の日であるというのに、どうして落葉いたのんなく、花は散っていくのだろうか。	M		○	不明	905		1	古今集	84	65	46	9	2							2			1	2	1		1	1		
34	藤原興風		三十六歌仙の一人。音楽の才能もあった。紀貫之や凡河内躬恒と同じ時代に大活躍した歌人だった。身分の低い役人として、一生を終えた。	これから誰を友とすればいいのだろう。朝霜のあるこの高砂の松ですよ。昔からの友ではないのだから。	M		○	不明	不明		1	古今集	909	35	14	5					4		3				2	2	2	1	1	1		
35	紀貫之		三十六歌仙の一人。醍と皆なじみで世俗だった。 子供時代の要性は阿古久慧。母は内教師で紀友をしていた。紀友則の従兄弟。藤原道真の教え子。幼少期に紀友則とともに歌会で在原業平に会ったことがある。「古今和歌集」の選者でもあり、「六歌仙」も選んだ。「土佐日記」の作者である。	さて、あなたの心は昔のままであるかどうか分かりませんし、しかし眺め深いこの里では、花は昔のままの香りで美しく咲きにおっているではありませんか。	M		○	不明	945		1	古今集	42	442	97	75	107				32	14	9	16			26	5	6	28	6	14	4	3
36	藤原深養父		古今集時代代表的な歌人。清原家は代々、歌と学問の家柄だった。清原元輔の父。清少納言の曾祖父。紀貫之たちと仲大交特良してあった。	夏の夜は、まだ宵のうちだと思っているのに明けてしまったが、いったい月は雲のどの辺りに隠れをとっているのだろうか。	M			不明	不明		1	古今集	166	39	15	5	1				5			1	2									
37	文屋朝康		文屋康秀の息子。平安時代に評判のあった歌人。低い官位のまま生涯を終えた。	（草葉のとに落ちた）白露に風がしきりに吹きつけている秋の野のまさは、まるで糸に通してとめてない玉が、美しく散り乱れているようではないか。	M			不明	不明		2	後撰集	308	3	1	2																		
38	右近		藤原敦忠と恋仲だった。醍醐天皇の皇后である藤子に仕えていた女流歌人。	あなたに恋のられる前夕のことは何ほどのこともありませんが、ただ神にかけて（あたしをいつまでも愛してくださる）誓ったあなたの命が、はたして神罰を受けはしないかと、怪しく思われてなります。	F			不明	不明		3	後撰集	870	10		5	3	1			1													
39	源等	参議等	嵯峨天皇の孫。	まばらに、低い草の生えている野のいの原、そのいの原の「しの」ということはなにかいなかい、わたしは、しのびにしのんできたのです、でも、今ではもうこらえきれません。どうしてあなたがこんなに、恋しいのでしょう。	M			880	951	71	2	後撰集	577	4		4																		
40	平兼盛		後撰集時代の代表的な歌人。赤染衛門の父。	人に知られまいと恋しい思いを隠していたけれど、とうとう隠し切れずに顔色に出てしまったことだ、何が物思いをしているのではと、人が聞きなさまとて。。	M		○	不明	990		3	後撰集	622	90		2	39	17	4	6			3	5			2	2	3	1	3	1	1	1
41	壬生忠見		壬生忠岑の息子で三十六歌仙の一人。村上天皇の前で開催された歌合せで平兼盛と勝負を競うが敗北。その後しまのあまりに食事がのどを通らず、病死したと言われている。	あの人を恋しているという噂が早くに広まってしまった、誰にも知られないようにひっそりと思い始めたばかりだというのに…。	M		○	不明	不明		3	後撰集	621	38		1	14				5			4			2	1	3	1	1	1	5	
42	清原元輔		三十六歌仙の一人。後撰和歌集の選者。清原深養父の孫。清少納言と清原致信の父。	かたく約束を交わしましたね、互いに誓て誓れた海を じぼりながら、波が あの末の松山を洗して越すことがないように、二人の仲も決して変わることはありますまいと。	M		○	908	990	82	4	後撰集	770	9			6																1	2
43	藤原敦忠	権中納言敦忠	藤原時平の子。右近の片思いの相手だった。	恋して、恋してたまらなかったあの人。でも、思いがかなってもにこ一夜を過ごした後の、なやましくせつない気持ちにくらべたら、あのころの恋しさなど、まったく恋しい思いの前にいりませんよ。	M		○	908	943	37	3	後撰集	710	31		11	5				2	2		1		1	1	2	2	1	2		1	
44	藤原朝忠	中納言朝忠	藤原定方の五男。右近の恋人だった。	男と女が愛し合う、そんなことが、この世になければ、冷たいあのあの人を、どうして、自分のいくじなさ、ちばたしたりしないだろうに。	M		○	910	966	56	3	後撰集	678	23		4	3		3		1	3		1			1	3	1		2		1	
45	藤原伊尹	謙徳公	藤原忠平の孫。藤原義孝の父。	あなたに見捨てられたやうなことっては、もはや、わたしをやわいそうこと思ってくれるんもいないだろうから、わたしは、このまま思いこがれながら、きっとむなしく死んでいくにちがいないだろうなあ。	M			924	972	48	3	後撰集	950	10			7			1									1		1			
46	曽禰好忠		円融院が正月の歌会を開いたとき招待されていないのに来てたたき出された。和歌の才能を認められたのは死後。	血夜の海峡を渡る船人が、かいをなくして、行く先も決まらぬまま波間に漂っているように、わたしたちの恋の行方も。どこへ漂っていくのか思い迷っているものだ。	M			不明	不明		8	新古今集	1071	97		9	9	6	17		16	7	4	5	3			3	5	1	2	2	3	3
47	恵慶法師		安法法師と平兼盛と恵慶之の親友。	このような、晩酒に も晩酒の良い酒っち歌は見れて聞いて、人は誰も訪れてはこないが、ここにも秋だけは訪れるようだ	M			不明	不明		3	後撰集	140	57		18	12	2	2		7	2	1	3			1	2	2		2	1		2
48	源重之		西好きの歌人として知られている。藤原実方を慕っていた。恵慶法師と親しかった。	あきりにも風がはげしいので、波は岩を打って砕かだけ くだけ散る。あの人は冷たく平気でいるのに、わたしだけはかんくだけ、恋の物思いしているこのこりです。	M		○	不明	不明		6	新古今集	211	72		14	14	3	2		11	1	5	1			11		3		1	3	1	2
49	大中臣能宣	大中臣能宣朝臣	「後撰集」の選者。「梨つぼの五人」の一人。伊勢大輔の祖父。	世中の財産を今と思とかかりりとは、夜は夢と思えていると、思間は消えるようになって、まるで、（夜は情熱に燃え、昼間は思い悩んでいる）わたしの恋の思いのようではないか	M		○	921	991	70	6	後撰集	225	128		59	26	4	8		10	2		2			2	2	2	4	2	1	1	1
50	藤原義孝		中立三十六歌仙の一人。藤原義孝の息。藤原伊尹の子。謙徳公の子。後撰集時代の歌人。藤原道長の叔父子。藤原実方と仲が良かった。	今まで、わたしは恋っていました。あなたに会うためなら この命も惜しくはない、でも、こうしてあなたに会えたから は思います。この恋ばでの中で、未来く生きたい、この命せもいつまでも長いとくないと思う のです。	M			954	974	20	4	後撰集	669	3		3																			
51	藤原実方	藤原実方朝臣	中流貴の子。宮廷時代に評判のあった歌人。低い官位のまま生涯を終えた。	こんなにあなたを思っているんです。でも、あなたには、とても言えません。ですから、伊吹山のさしも草（もくさ）ではないけれど、熱く、深く、燃えているあなたの思いなど、よもやあなたは、ごぞんじないでしょうね。	M			不明	998		4	後撰集	812	69		7	14	1	3	4	12	4	2	3	2		7	2	1		2	3	1	1
52	藤原道信	藤原道信朝臣	謙徳公の孫。２１歌で父をくしく。23歳でくなった。	夜が明けばかりで日が暮れそうれはまた、恋しいあなたにおあいする。そんなことはわかっているものの、やはり、別れて帰らなければならない相手は、うらめしいものです。	M			不明	994		4	後撰集	872	48		2	11	1	1	5	8	6	1	2	2	3	3	3		3	1	1	1
53	藤原道綱母		「蜻蛉日記」の作者。関白・藤原兼家の妻。右大将道綱の母。本朝三美人の一人。	（あなたが来てくださらないことを）嘆き しみるかぶりとり下世を手で私にとって、彼が明けるのがとれほど長く感じられるものか、あなたはいったいだ?だりなのでしょう。	F			936	995	59	3	後撰集	912	39		6	6	3	2		2	2		1			11	4	2		3	4	1	1
54	高階貴子	儀同三司母・高内侍	高階成忠の子。藤原道隆の妻。藤原伊周と中宮定子の母。藤原道隆の寵愛。藤原道隆との結婚を決めたのは藤原義孝が藤原道隆に頼除がまりていたことを聞いたことがきっかけ。歌人一家の和歌は後鳥羽院とも気に入っていた。	大空をはるかにみわたすと、月が美しくのぼっている。ああ、この月はふるさとの春にある、三笠の山にのぼった、あの月つかしい月なのだ。	F			不明	999		1	古今集	1149	5		1	2			1															
55	藤原公任	大納言公任	藤原定頼の父。藤原実方と従姉妹。和歌の流れを受け継ぐ和歌の大家で「三十六人撰」を選んだ。	私の草庵は都の東南にあって、そこで静かにくらしている。しかし世間は私が世の中から隠れてこの学問の心に住んでいるのだと世ってしまうよ。	M	○		不明	不明		7	千載集	1035	95	15	19	3	5	11	6	1	3	4	2		11	3	2	3	3	1	2	1
56	和泉式部		平安時代を代表する最高の女流歌人。子式部内侍の母。紫子に仕えた。	私は今、すっかりとあなたのものになってしまったように、私の容姿もすっか変えてしまった。春の長雨が降り続き、私が人の恋にふけっている間に。	F			不明	不明		4	後拾遺集	763	244		1	67	7	16	21	25	14	16	3	6		14	4	5	7	4	4	4	3
57	紫式部		「源氏物語」の作者。藤原為時の娘。藤原惟規の妹。藤原宣孝と結婚し、大弐三位を生んだ。夫と死別し、一条天皇の中宮彰子に仕えた。藤子とは仲なしかった。	うしおりにのって早くのたに、そのがあなたかどうかも分からない間に帰ってしまうなど、まるで雲に隠れてしまった夜中の月のようではありませんか。	F			970	1019	49	5	新古今集	1499	61			3				9	14	5	3	7	3		8	4	2	1	4	1		
58	大弐三位	藤原賢子	紫式部の子。高階成章の妻。「紫式部日記」の手紙文は、藤原賢子が成長したときのために、紫式部が心をくだいて書いたものだといわれている。15歳のときに母をくし、母のあとを ついで、彰子に仕えた。高階成章と結婚し、大弐三位とよばれるようになった。	有馬山に行く途中の、稲名のさき原に秋風がふく。さきの風はすえるとと音をなでます。あなたのほうから風が吹けば、わたしは、そよそよとうなずきます。あれ、そうでしょう、どうしてわたしの、あなたを忘れたりするでしょうか。	F			999	不明		4	後拾遺集	709	37		9	1	1	4	6	3		1	1		2	1	1	2	1	1	1	1	1
59	赤染衛門		中立三十六歌仙の一人。赤染時用の子。中宮彰子に仕えた。赤染衛門と呼ばれたのは父の赤染時用の官の右衛門尉からきている。	（あなたが来ないと知っていた）ネっと寝てしまえばよかったものを、（あなたの約束を信じて待っていたい）とうとう明け方の月が西の空に傾くまで眺めてしまいました。	F			不明	不明		4	後拾遺集	680	99		1	32	4	8	6	10	1	6	3	4		7	1	2	6	1	5	1	
60	小式部内侍		和泉式部の子。藤原定頼に「君の和歌は母ではいかってらっかのではないか」と言葉された際、自分で和歌を作ったことを主張する和歌を読んで定頼を あっと言わせた。しかし、恋関係の末まで同じ。和泉式部は思ってて、言葉や言の葉を重ね合った。	母のいる所の国へは、大江山や生野を越えて行かなければなりません。そんな遠い国へ行ったことも、これからの国立にも、まだ行ったことがありませんし。	F			不明	1025		5	後拾遺集	550	10			1	3	1				2										1	
61	伊勢大輔	伊勢大輔	中立三十六歌仙の一人。大中臣能宣の孫。和泉守高雅の娘。一条天皇の中宮彰子に仕えた。紫中に八重桜が植えされたとき、藤原道長に桜の実が取り 返を怪された。最初は藤式部が中を予定だったが、紫式部が難義した。そのときの歌が百人一首に載った。夫に先立たれ、国になった。	その色、香りの変り様を誰に知らせようか、百の実中で一段と色美しく咲いています。	F			不明	不明		6	四百集	29	51			27	1	2	2	7	3	1	2			2	2	2		2	3		1
62	清少納言	清原諾子	中立三十六歌仙の一人。「枕草子」の作者。清原元輔の子。清原深養父の孫。一条天皇の中宮定子に仕えた。藤原行成とは友達だった。藤原実方と仲が たった。藤原伊周のことが「枕草子」に書かれている。藤原知定藤原と結婚し、大弐三位を生んだ。夫と死別し、一条天皇の中宮彰子に仕えた。藤子とは仲なし 関係だった。	夜の明けないうちに、鶏の鳴き声を真似て夜が明けたたとまるうとしても、（あの中国の函谷関ならいざ知らず、あなたとわたしの間に関は、ありませんのに）この逢坂の関は決して、あなたとわたしの間に通さ!この逢坂の関は決して、決して開くことはありますまい。	F			966	1020	54	4	後拾遺集	939	16		2	1	2	3		1	1		1	3								1		
63	藤原道雅	左京大夫道雅	中立三十六歌仙の一人。藤原道隆と高階貴子（御同三司母）の孫。祖名は定家。父伊周が事件を起こしてから実家が没落。相模を恋慕の嘘が広えず、荒三位と呼ばれた。当子内親王と恋仲だった。	「今となっては あなたのことはもう あきらめます。」という一言を人を通じてではなく、直接言う方法はないのだろうか。	M			992	1054	62	4	後拾遺集	750	8		5	1	1																1
64	藤原定頼	権中納言定頼	藤原公任の子。三条天皇の在位で皇太の母は大臣一方たった才情を認められて蜜相続天皇家をふりのもし役割をも時取り上げられた。15歳の字 武部内侍をかなかなって武に引っとられて武は恋上恋が発生。	夜が明けの